

七十七ビジネス大賞受賞

第15回(平成24年度)

企業 インタビュー

Interview

株式会社橋本店

代表取締役社長 佐々木 宏明氏



会社概要

住 所：仙台市青葉区立町27番21号
設 立：明治43年(創業：明治11年)
資 本 金：300百万円
事業内容：総合建設業
電 話：022(714)7020
U R L：http://www.hashimototen.co.jp/

宮城県内で多数の建築・土木の施工実績を重ね、インフラ整備・経済発展に大きく貢献、東日本大震災の復旧・復興活動において県を代表する総合建設業としての実力を発揮

今回は「七十七ビジネス大賞」受賞企業の中から、株式会社橋本店を訪ねました。当社は、創業135年を誇る宮城県を代表する総合建設業であり、宮城県建設業界のリーダー的企業です。宮城県内における数多くの建築・土木の施工実績があり、宮城県の都市開発および経済の発展に大きく貢献しました。東日本大震災においては、復旧工事の要請に素早く対応し、高い評価を受けています。当社の佐々木社長に、今日に至るまでの経緯や事業内容などについてお伺いしました。

——七十七ビジネス大賞を受賞されたご感想をお願いします。

大変名誉ある賞を頂き、誠に光栄です。これも偏に、多くの皆様のご支援の賜物であると改めて深く感謝しております。

東日本大震災からの「復旧・復興優先」を掲げ、一日も早い地域の復興実現を目指して日々努力して参りましたが、この度の受賞を機に、今後も着実に事業を進めることを通じ、地域の皆様のお役に立っていきたくと決意を新たにしております。

——創業から今日に至るまでの経緯について教えてください。

明治11年に、当社の創業者である橋本忠次郎が「橋本組」を興し、宮城集治監(現：宮城刑務所)の建築工事を請け負いました。当社では、この明治11年を創業の年としています。

その後、鉄道の原点である馬車会社「万里軒」を設立し、明治14年に仙台～白石間に駅馬車を走らせ、明治16年には福島まで延長しました。

明治20年代には、鉄道が全国に普及し始め、橋本組は元請として函館本線、陸羽東線、常磐線など、多くの鉄道工事を請け負いました。

また、明治末期の頃からは、建設工事請負のほか、製紙工場や印刷会社の運営、炭鉱の鉱区運営など、多角的に経営を行っており、明治43年に「橋本組」から「橋本店」に社名を変更しました。

戦前は鉄道および軍需関係の工事が中心でしたが、戦後は建築・土木部門ともに戦後復興関連の公共工事、民間需要が大幅に増加しました。

昭和50年代以降は、オイルショック、バブル経済崩壊など混迷する経済情勢の中、建設業界は不振を極め、当社も大変厳しい環境にありましたが、着実に事業を行い、今日に至っています。

私で社長は9代目になります。



本社「橋本ビルディング」

変化し続ける企業

——シンボルマークの由来について教えてください。

当社のシンボルマークは「空を飛ぶクジラ」です。かつて、クジラは犬のように四足で陸を歩いていましたが、肉食獣から命を守るために、陸よりも安全な海を生活の場を選びました。そして、生き残るために自分の体を変化させ、今の姿に進化したと言われています。今は海を泳いでいるクジラに夢がある

としたら、それは空を飛ぶことかもしれません。

当社も、135年の歴史の中で、その時々時代の变化に合わせた事業を行い、クジラのように形を変えながら存続してきました。厳しい時代で生き残るためには、今までのやり方をなぞっていくだけではいけません。街づくりに対する夢を大切に、社員一人ひとりが現状に甘んじることなく、常に新しい発想と果敢な行動で取り組むことが大切だと考えています。「空を飛ぶクジラ」には、これからも時代に合わせて変化し、存続していく企業でありたいという意味が込められています。

ダーウィンは進化論の中で「生き残るものとは、強いものではない。賢いものでもない。変化できるものである」と述べています。私もそのとおりだと思います。135年続いたから、これからもずっと続くということはありません。常に時代に合わせて変化し続ける企業でありたいと考えています。



HASHIMOTO TEN

株式会社 橋本店

シンボルマーク「空を飛ぶクジラ」

——経営理念についてお聞かせ下さい。

当社では、①時代の変化に適応する人づくり、②信頼される堅実なものづくり、③地域社会に貢献する会社づくりという3つの経営理念を定めています。

社員たちには、「ただ単にものをつくるだけではなく、その地域の人々に何か恩返しをして帰ってきましょう」と言っています。「何か困ったことはありませんか。我々建設業にお手伝いできることはありませんか」と、常にお客様目線で行動することで地域に溶け込み、信頼を得ていこうと考えています。そして、品質ナンバー1の会社を目指し、常に技術力の向上に取り組んでいます。

——人材育成への取り組みについてお聞かせ下さい。

135年の歴史の中で様々な仕事を行ってきましたが、橋本店の「売り」というものが見えませんでした。そこで、お客様にとっては「現場」が橋本店の「顔」になりますので、現場の社員、そしてものづくりに対する姿勢をお客様にアピールしていこうと考え、「社員教育」を徹底して行っています。

毎月第2土曜日を会議の日とし、全社員を対象とした研修会を行っています。研修会を通して、各自の技術やアイデアを共有することにより、会社全体の技術力の向上を図っています。

また、社員一人ひとりが橋本店の「顔」であることを自覚し、地域の皆様が困っていることはないか、自分たちにできることはないかということを常に考えて行動する習慣を身に付けるように指導しています。

総合建設業としての役目

——事業内容について教えて下さい。

総合建設業として、土木・建築の請負を行っています。事業の割合としては、土木が6割、建築が4割です。受注元の割合としては、官庁が9割、民間が1割となっており、現在は官庁からの依頼が多くなっています。平成24年度は受注高216億円、完工高205億円となっています。これまでに、宮城スタジアムや仙台空港、夢メッセみやぎ、宮城県美術館などの宮城県を代表する建造物を手掛けています。



「宮城スタジアム」



「夢メッセみやぎ」

最近では、駐仙台韓国総領事館を建設した時の縁で、東京都新宿区に「韓国文化院（以下：文化院）」を建設しました。文化院は、韓国の伝統的民族舞踊「僧舞（スンム）」をイメージしたデザインで、複雑な外観、300席以上のホール、屋上庭園、中間層免震構造など、大手建設業者が行うような難易度の高い仕事でした。建設の依頼がきた時は、社員から「東京まで行ってこんなに難しい仕事はできない」という意見もありましたが、私は難しいことにチャレンジするからこそ社員に自信と誇りが生まれるのだと考えています。「130年以上建設業を行ってきて、この仕事ができないはずがない」と社員に宣言し、建設に踏み切りました。

建設中は大変なことも多々ありましたが、2年かけて完成させました。完成後、社員全員を東京に連れて行き、文化院を見せました。実際に完成した文化院を見ることにより、社員の中に「やればできる」という自信と総合建設業としての誇りが生まれたと思います。これは、お金では買うことのできない貴重な経験になりました。また、タワークレーンを使うような高層ビルの建設も行えるというアピールになったと思います。

お客様の中には「大手にお願いすれば良いものができる」という先入観をお持ちの方が多いと思



「韓国文化院」

います。しかし、地元企業でも大手に負けない技術を持っている企業はあります。宮城県内の建設業の皆さんは、あまり自社の技術をアピールしないように感じますが、地元企業でもやればできるということをアピールしていかなければいけないと思います。

そのためにも、当社は、地元企業と競争するのではなく大手と競争し、大手が手掛けるような難易度の高い仕事にチャレンジしていきたいと考えています。そして、地元企業でもできるということをPRしていくことが、135年間建設業を続けてきた当社の役目だと考えています。

くじらのメガソーラー発電所

——太陽光発電事業について教えてください。

東日本大震災後、自然エネルギーに注目が集まっていたし、当社としてもエネルギー問題に真摯に取り組んでいこうと考え、異業種である太陽光発電事業への参入を決意しました。平成24年6月に事業計画を開始し、同10月に着工、平成25年2月20日に開所式を行いました。当社のシンボルマークから「くじらのメガソーラー発電所（以下：発電所）」と名付けました。行政への申請期限などがあり、約5ヶ月という短期間での工事でしたが、自社の所有地を利用したことや変電所が近くにあったおかげで、スピード感を持って工事を進めることができました。

敷地面積が34,900㎡あり、1枚あたり155wの発電量を持つ太陽電池パネル（以下：太陽電池）を10,000枚設置しています。年間発電量は約157万kwhあり、一般家庭約450世帯分の年間消費電力量に相当します。環境への効果としては、年間約750tのCO₂排出削減効果があります。仙台市内では最大規模であり、平成24年度の売電稼働では県内最大を誇っています。

発電所は、以前産業廃棄物処分場として利用していた自社所有地に建設しました。地中に産業廃棄物が埋められているため、その後の利用見込みがない土地でしたが、太陽光発電であれば表面に土台を乗せるだけで設置することができるので、土地の有効



「くじらのメガソーラー発電所」

活用という点でも取り組む価値のある事業だと感じています。

主な特徴は3つあり、1つ目は、太陽電池です。当社では、雪国に適した国内メーカーの「ソーラーフロンティア」製の太陽電池を使用しています。積雪などにより太陽電池の一部が覆われてしまうと発電できなくなる機器もありますが、「ソーラーフロンティア」製の太陽電池の場合は、一部が覆われてしまったとしても、残りの部分で発電することが可能です。また、景観を配慮し、太陽電池のフレームには黒色のフレームを採用しています。周辺地域に調和した落ち着いた色調を実現し、周囲への環境配慮も行っています。

2つ目は、パネルの設置角度です。効率よく発電するためには、太陽電池に対し、太陽光が90°に当たることが望まれます。当社では、発電所の敷地面積や発電量とのバランス、太陽電池に積もった雪が滑り落ちやすい角度などを計算し、設置角度を10°にしています。さらに、周辺地域の平均積雪量が50cmであることから、太陽電池への積雪を防ぐため、地面から50cm高い位置に設置しています。

3つ目は、パワーコンディショナです。パワーコンディショナとは、太陽電池が発電した直流電流を、一般家庭で使用する交流電流に変換する装置です。当社のパワーコンディショナは、太陽電池の発電能力を最大限に引き出す機能や、日照の変化による出力変動を抑制して安定した電力を供給する機能を内蔵しています。

また、発電所内に太陽電池を一望できる展望台を

設けました。地域の子どもたちが再生可能エネルギーを学べるような見学会などを随時開催し、地域社会に貢献していきたいと考えています。

——地域貢献への取り組みについてお聞かせ下さい。

1つ目は、現社屋の建設にともない、それまで社屋として利用していた旧橋本邸を寄贈させていただきました。家屋は仙台市に寄贈し、現在では大年寺山の野草園前に「茂ヶ崎庵」として再建され、茶会や句会などに利用されています。仏間は日蓮宗東北総本山孝勝寺に寄贈し、現在は「報徳堂」として再建されています。

2つ目は、ゆかりのある櫻岡大神宮に、復興祈願の大鳥居を奉納寄進し、現在は、屋根全体の葺き替え工事を行っています。

3つ目は、定禅寺通りの清掃活動です。100年以上お世話になっている通りですので、感謝の意味を込めて、青葉祭りや七夕祭り、ジャズフェスティバルなどのイベントが開催された翌朝に、社員全員でゴミ拾いをしています。また、各工事現場においても週1回、現場内および現場周辺の一斉清掃活動を実施しています。



「定禅寺通り清掃活動の様子」

復旧・復興優先

——震災復興への取り組みについてお聞かせ下さい。

当社では、リスクマネジメントの一環で「緊急時企業存続計画（BCP）」を導入し、震災発生直前の平成23年3月1日に、仙台市宮城野区高砂に「災害対策センター」を設置していました。衛星電話や

発電機、土のう、ブルーシートなどを備蓄し、災害時に対応できる体制を確立していたことから、震災発生後、迅速に対応することができました。



「災害対策センター」

震災発生後は、直ちに対策本部を設置し、「復旧・復興優先」のスローガンのもと、国・県・市・民間からの要請に対応しました。復旧対応要請は、平成23年3月から同10月までの8ヶ月間に260件あり、特に3月は80件でした。当社で自発的に行った建築関係の被害調査を含めると、合計では671件に達しました。

最初の要請は、救援車両が通るための道路の確保でした。被災地に緊急物資を送ろうとしても、瓦礫の山が道路を塞いでしまい、通行できない状況でした。そこで、とにかく救援車両だけでも通れるように瓦礫を処理し、段差を修正して救援ルートを確認しました。

また、建設機械、重機の燃料供給運搬も行いました。高砂の防災センターが給油基地となり、宮城県内のみならず、岩手県大槌町まで燃料を運搬しました。津波による被害で海岸道路が通行不可能だったため、遠回りしなければならず、朝6時に仙台市を出ても、大槌町に着いたのは夜10時でした。

建設や土木工事に限らず、復旧・復興のために何でも対応したことが評価され、国土交通大臣から感謝状を、国土交通省東北地方整備局長からは表彰状をいただきました。会社が一丸となり、社員全員が何をしなければならないのかを自覚し、使命感を持って取り組んだからこそ、評価していただいたのだと感じています。自らも被災している中、不眠不休

で作業に当たってくれた社員には、本当に感謝しています。



「復旧・復興活動の様子」

——今後の事業展開についてお聞かせ下さい。

今後も継続して復旧・復興工事に対応していこうと考えています。特に、当社では最大300tの重量を吊り上げることができる「全旋回式フローティングクレーン」などの起重機船や、海上で生コンクリートを製造することができる「コンクリートプラント船」など、海上での震災復興に活躍する船舶を所有しており、他社では取り組めない海洋土木を行うことができます。現在も、仙台港の防波堤復旧工事に取り組んでいます。

また、これまでは瓦礫処理や防波堤整備が主流でしたが、今後は整地工事や盛土、その後に建設関係の仕事が増えてくると思います。復旧作業は急を要しますが、本格復興は時間をかけてランドデザインをつくり、災害に強い街づくりを進めるべきだと考えています。そこで、これまで培ってきた総合力を活かし、施工するだけでなく付加価値の高い設計を提案し、「設計施工」に取り組んでいきたいと思っています。



「全旋回式フローティングクレーン」



「コンクリートプラント船」

加えて、橋本店の原点は「鉄道」にあります。原点に戻り、鉄道関係の仕事にもチャレンジしていきたいと考えています。

肌感覚

——会社経営で大切だと思うことをお聞かせ下さい。

現在のような変化の激しい時代で求められるのは、「肌感覚」で仕事ができる経営者だと思います。経営の基本は、常に現場に出て自らの肌で感じ取ることです。将来を見据え、先回りする営業が大切であり、そうしなければ本当のポイントは見つかりません。漁師に例えて言えば、良い仕掛けを準備し、小回りの利く性能の良い船を操り、自らの肌で魚のいるポイントを感じ取らなければ、獲物を釣ることはできないということです。

私も月に1度は必ず現場の様子を見に行くのですが、そこで働いている社員の顔を見れば、大体どのようなものができるか分かります。常に現場を最優先に考え、経営者自らが現場に立ち、お客様や社員と接し、感じる事が非常に大切なことだと思います。そして、社員一人ひとりにもその感覚を身に付けさせる必要があると考えており、社員の教育・育成に努めていきたいと思っています。



佐々木社長

長時間にわたりありがとうございました。御社の今後のますますの発展をお祈り申し上げます。

(25. 5. 20取材)